



障害をもつ幼児の保育(18)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

聴くことを考える

幼い子は体全体で聴いている

M 言葉を話さない子どもたちは、大人が思っている以上に多くのことが分かっています。子どもは体全体で聴いて感じとっていますが、何をどのように聴いているのかは、はっきりとは分かりにくいですね。その

ときには分からなくても、後になって分かってくることが多いのです。

F 私が初めて自分の赤ちゃんを抱いたとき、寝かそうとしてもなかなか眠らなくて困っていたら私の母から「母親が焦っていいはだめ。お母さんも眠くなるくらいでないと、赤ちゃんも眠らない」と言われまし

た。今考えると胸に抱かれた赤ちゃんは、私の息づかいを体全体で聴いているので、その息づかいに合わせて安心したり苛立ったりするのでしよう。母親の息づかいだけでなく、おなかの中にいるときは、母親の脈拍や血流の音も聞こえるでしょうし、外の音も羊水などを通して聞こえてくるのでしよう。毎日乗り物に乗ることの多い母親や、人に接することの多い母親のおなかにいる子など、体全体で聴くのですから、聴くことや感じ方に、ひいては存在感や安定感に違いがあるのは当然ですね。

M 乳幼児期にはどの子も敏感だったり気難しかったり育てにくいという点では共通ですが、特別繊細な子どもは、音によって強い不安を呼び覚まされます。

F 私が忘れられないのは、うちの子どもが二歳ころ外に行つたとき、車が来たり飛行機の音がしたりすると、キーンと叫んで私にしがみついていたことですよ。

M そんなときはどんな慰めも役に立たない。ただそばにいてやるだけです。その子にとっては大きな音は外から迫ってきて、自分の存在を脅かすものだから大変な恐怖だと、私たちが気が付くまでには時間がかりました。夜中に風が吹いて雨戸がカタカタと鳴ったり、『火の用心』の見回りのカチカチという拍子木の音がしたり、人の話し声があるとそのたびにその子は目を覚まして泣きましたね。

F 私も子どもの時『火の用心』の音はこわかったので、それにはすぐ共感できました。夜中に泣いた次の朝、この子が明るい光の中で風車を持つて走りながら、夜中の嵐と同じ風だと知ったときのようすは、子どもの中にある『詩』を見せてもらったようでした。

M 同じ風の音が不安をも呼び覚ますし、楽しさもたらず風にもなる。子どものそばにいてだけで何も役に立たないと思つていても、そんな場面を見せてもらえるのは保育者の喜びかな。

F 音に驚いたり、夜中も目を覚まして泣いたり、乳幼児期の大変さが成長と共に変化していくところを、いろんなお母さんたちといっしょに探すことを、私たちは一生の仕事にしてみましたね。

M このごろよく聞くことに、子どもの寝付きが悪くてなかなか眠らないので、車に乗せてお散歩というお散歩にいくと、しばらくしてやっとな眠りつくということがあります。町をベビーカーにのせられていくのもよく見かけますが、車の振動の音が体に伝わって心地よいのだろうか。

F 現代の子育てではベビーカーを使う人のほうが多いでしょう。でもそれはお母さんの背中におんぶされて聞く呼吸の音や、汗ばんだ触覚とは少し違いますね。ベビーカーに乗るのが、きらいという子もいます。一概には言えないけれど、人と肌を触れ合うことよりもベビーカーや車による子守りが主流になっていることが、人との付き合いが苦手な子どもを作っている

のかしら。

M 電車や自動車の走るあの力動的な音や空気の動きに魅せられる子は多いですね。電車の音を鋭く聞き分けて、JR線とか、新幹線とか言う子もいますが、後になって聴音能力が特別優れている事が分かってきて、音楽の才能を見せ始めた子もいます。それまで育てにくいとか、何だか理解しにくい子どもと違って、いたことが、それだけではないと分かってくるのです。

保育者の役割は、その子を分らないまま肯定的に、持ちこたえるということにあるように思います。

言葉を聞く力……

聴き分けて自分と結び付ける

M 言葉を話す前には言葉を聞く段階がある、とよく言われるけれど、音を受動的に聞くだけでなく、その音が自分にとって意味を持つことが分かるとき、『聞くこと』は一步自分を広げて、耳を傾けて『聴くこ

と』になり、他人と自分とを結び付けることになりま
す。

F 聴くことから話すことへ、子どもたちはどのよう
に新しい言葉という道具を使うようになるのか、最
近、一歳八カ月の孫を見ていて学ぶことが多くありま
した。この子の母親が仕事に行くのは不定期なので、
この日はだれとどこで過ごすのか、母、父、祖母、祖
父がそれぞれのスケジュールを見て相談している
とき、じつと聞き耳を立てているように見えました。あ
るとき、母親と祖母（私）が食事をめぐって言い争い
をして（笑い）いたら片方の目が小さくなつて、
ちよつと伺うように大きい方の目で、母と祖母を見比
べているのです。内容が分からなくても何か自分をめ
ぐって不協和音が出ていることを感じ取っているの
です。それ以来言い争いはやめました。

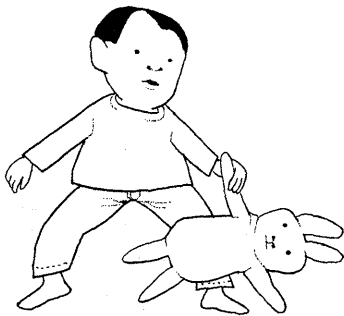
M 今、私が見ているひとりの子は、大人が話してい
ると高い戸棚の上に乗ってしまうのです。この子につ

いて、親たちが将来の不安や迷いを語るのを聴くとそ
れが分かるのです。こんなに幼い子どもが大人の話に
聞き耳を立てている様子は、はつとさせられますね。

子どもが自分の気持ち

言葉と体で表現する

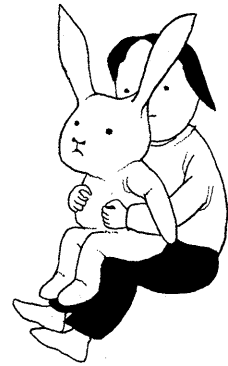
F 言葉の出始めた幼い孫のそばにいて気が付いたの
は、人やモノを指し示すための言葉よりも、この子の
場合は状況に対する気持ちを表す言葉が盛んに出てき



たことです。例えば「あんなに」とか「こんなに」など自分の気持ちを表そうとして、時には手を大きく動かしたりもしました。虹を初めて見たとき、手を空に伸ばして弧を描くような動作とともに「こんなに、こんなに」と言っただけです。

これは副詞的用法ですよ。虹を見たときのすごいと思った自分の気持ちを表現しようとしていることでしょう。このことは本当に忘れられないことでした。

ところがある研究会で、『養護学校の子が給食のとき、ミカンが大好きで食べたいのに御飯をちゃんと食べたら、ミカンを食べたいと言われたそうです。そうしたら、泣きながらやっつ御飯を食べて「こんなに、こんなに」と言っただけ丸呑みのようにしてミカンを食べた。』という話が出ました。こんなに食べたかったのに、というこの子の気持ちが出ています。もちろんこのやり方には、反対の意見の人が多かったのです。私もこういうやりかたには反対ですが、その反



対の根拠として、その子がこのころ『おうむがえし』の言葉を使っていたという説明を聞いていたので、泣きながら自分の悔しい『気持ち』を言葉で表したことは、この子が内面をもった人に成長しつつあることで、とても大事な時期だと考えました。

そして『おうむがえし』ということについて考えさせられたのです。

『おうむがえし』とは何か

M 『おうむがえし』といわれるのは、相手の言葉をそのままなぞるように返事することですね。「早くし

なさい」と言われると、子どもも「ハイ」ではなく「早くしなさい」と同じように言うことですが、私たちのまわりには、『おうむがえし』の言葉を使う子は沢山います。そしてこれらの子は言葉がおかしいとしばしば考えられたり言語指導をしなればと言う専門家もいるようです。

F さつき、相手の言葉を聞くのは自分の枠を広げて、その意味を聞き取るとき、受動的な『聞く』ではなく、『聴く』ことになると話しました。その続きを考えると……。

M そう、自分の枠を越えて相手にかえすことで、会話が成立するのだね。

『おうむがえし』では会話にならないというのも、一応もつとみだけでも、一人ひとり子どもに即して考えてみると、なぜ、『おうむがえし』ではいけないのかと考えているんですよ。

F 『おうむがえし』という形で自分の枠を保つこと

によって、子どもによっては安心感が出来るのではな
いか。そう考えるのでしょうか。

M そう考えると、少し不完全でもその子の表情や、
前後の様子でこちらが意味を受け取っていけば、会話は
充分に出来ると思う。

私は保育にはいる前に、自分の先入観を取り払うこ
とを毎回心掛けています。つまり自分の枠を取り払う
ことは、私にとって努力を必要とすることなんです。
でも、まだ自分自身が確立していない子どもにとって
は、私以上に、枠を超えて話すことが大変な場合もあ
るでしょう。だから、私たちが大人として自分の枠を
取り払う努力を続けるのでしよう。

子どもは黙っていても大人とは違った感覚で世界を
見えています。子どもの見ているものは詩的であり、真
実を含んでいます。